

## ASD のコミュニケーションと意図

「自閉症は津軽弁を話さない」から意図の問題へ

企画者	松本敏治（教育心理支援教室・研究所 ガジュマルつがる）
司会者	菊地一文（植草学園大学）
話題提供者	松本敏治（教育心理支援教室・研究所 ガジュマルつがる） 清野宏樹（北海道釧路養護学校）
指定討論者	菊地一文（植草学園大学）

KEY WORDS: 自閉スペクトラム症 意図 コミュニケーション

### 【企画趣旨】

松本らは、「自閉症は津軽弁を話さない」という噂をきっかけに ASD の方言不使用という印象について実証的理論的に検討をおこなってきた。幼児期の自然言語習得およびコミュニケーションにおける方言の機能を検討する中で、意図理解や意図への働きかけが果たす役割の重要性を指摘し、ASD の方言不使用について社会性の側面からの解釈を提出した（松本, 2017）。本シンポジウムにおいては、コミュニケーションにおける意図理解・意図調整（働きかけ）・意図の参照が果たす役割を検討し、このような視点が学校現場での ASD のコミュニケーションの理解および支援にどのようなつながるかについて討論する。

### 【話題提供者の趣旨：松本敏治】

松本らは、「自閉症は津軽弁を話さない」という青森県津軽地方の発達障害関係者の噂をきっかけに、ASD の方言使用について全国で調査した。この印象が特別支援教育に関わる全国の教員の間で普遍的に認められるものであることが明らかになった。さらに、青森および高知の特別支援学校において ASD と ASD を有しない児童生徒（non-ASD）の方言語彙使用について調査を行った結果、ASD が non-ASD に比べて方言語彙を使用しないことも報告した。

松本らは、この現象について理論検討を行い、方言の社会的機能説をもとに社会性の障害との関連での解釈を提出した。また、言語習得期における ASD の方言不使用について理論検討を行い、周囲の人々が使用する自然言語（方言）を習得するためには意図読み・理解が重要であると指摘し、ASD は意図読み・理解に困難を抱えるために方言を学ぶことが困難になる一方で、繰り返し視聴するメディアからのことば（共通語）を意図理解が不十分なままに学習していくことがあると主張した。人は相手も自分も意図（目標とそれにむけたプランの作成と調整）をもった人間であることを前提に意図読み・意図調整（働きかけ）・参照を行っている。意図はコミュニケーションにおいて重要な役割を果たし、ことばは意図を含む相手の心的状態を操作するために使用される。本シンポジウムにおいては、1）意図理解・調整・参照など意図に関連する問題の整理、2）意図理解あるいは目的指向的な行動の理解において重要な役割を果たすとされるミラーニューロンとの関わり、3）集団行動や協調行動における意図の共有の問題、について話題提供を行う。

### 【話題提供者の趣旨：清野宏樹】

小学部の同学年児童 4 名（ASD2 名、発達障害 1 名、筋ジストロフィー 1 名、全て ID を伴う）を対象に、松本（2017）の意図理解・調整・参照モデルのチェックリストを試みた。意図理解に限定した項目と、模倣・ごっこ遊び・ことば・共同注意・意図等の関連項目に分けて集計を行った。ASD の男女 2 名では、女子で参照行動が一部みられたものの、

意図読み・調整の項目では該当する行動は見られなかった。発達障害と筋ジストロフィーの児童では、意図読み、参照、調整の項目で該当行動が多く確認された。関連項目について ASD と発達障害・筋ジストロフィーで比較したところ、ASD の女子ではごっこ遊びの項目以外では該当行動が見られ、発達障害・筋ジストロフィーの児童との間には顕著な差はなかった。しかし、項目の中には、ASD と他の 2 名で顕著な差がみられるものもあった。それらは、「お願い」行動の後の相手の表情の観察や相手の意向の確認など、意図読み・理解等に関連するものであった。ASD 児間の発達の段階による差はあると推察されるが、発達障害と筋ジストロフィーの児童が高い数値を示した結果と比較して、ASD の意図理解・調整・参照の困難さが明確になった。学校現場の指導・支援の手立てにおいて、学習場面の感情を共有したり、どのような意図の場面であったかを対象児童にわかりやすく再現したり、伝えたりすることで、理解を促す可能性があると思えた。また、指導・支援事例から、意図読みや共有、更には調整や参照が関係性やコミュニケーションにおいて重要であること、具体的な場面を捉えた指導・支援によって改善しうる可能性が示唆された。

### 【指定討論者の趣旨：菊地一文】

本研究は、質問紙調査等の実施によって「ASD は方言を話さない」という風聞が全国共通の現象かを検証し、ASD の方言不使用の実態を明らかにしてきた。さらに、その要因等についてインタビュー調査や方言学の先行研究を踏まえた理論的検討を進めることにより、ASD の中核障害といえる社会性の問題に関連する ASD の言語習得過程の課題にたどり着いた。松本（2016）は、現時点でこの課題のポイントを「意図読み・理解」とであると指摘しており、その仮説検証のための方法を検討し、臨床に携わる教員等に評定を求め、予備的研究を進めている。昨今、当事者を中心とした、実践に寄与する研究と研究知見の実践化双方がより必要とされているが、松本の指摘は、まさに適切な指導及び必要な支援を進める上で重要なテーマの一つであるといえる。また、本研究におけるオーソドックスかつ緻密な研究手法は、実践と研究の融合が求められる昨今、学校現場においても参考となるものである。これまでのシンポでは ASD の特性やことばのもつ「意味」だけではなく「機能」に着目することで、ASD に対する言語指導の在り方について再考する必要性を指摘してきたが、どのような「かわり」が彼らの育ちや学びに寄与できるのかについて討論をとおして検討していきたい。

### （文献）

松本敏治（2017）自閉症は津軽弁を話さない 自閉スペクトラム症のことばの謎を読み解く、福村出版  
(MATSUMOTO Toshiharu, KIKUCHI Kazufumi, SEINO Hiroki)